

# 黒塚古墳(天理市)

正面が黒塚古墳/前方後円墳/右手が後円部、左手が前方部/3世紀末～4世紀初の築造/前方部と後円部の落差が大きい古式の墳形



主体部は合掌式の竪穴式石室/盗難をまぬがれ、石室、鏡などの副葬品もほぼ完全な状態で残っていたと云う

## くろづかこふん 黒塚古墳 (国史跡)

黒塚古墳は、全長 130m の古墳時代  
前期初頭 (3 世紀末～4 世紀初) に築か  
れた大型前方後円墳である。



平成 9・10 年に行  
われた発掘調査では長大な竪穴式石室が見つかり、  
三角縁神獣鏡 33 面、画文帯神獣鏡 1 面、多数の  
刀剣や鉄鏃、冑など副葬品が出土している。  
黒塚古墳は、ヤマト王権が成立した時代に築かれ  
た古墳で、初期国家形成に関わった有力者の墓と思  
れる。

## 天理市立黒塚古墳展示館

展示館では、発掘当時の石室を実物大で再現し  
ています。石室の様子や三角縁神獣鏡、画文帯神  
獣鏡の出土状態など、精巧な複製品を用いて公開  
しています。(入館料無料)



## やなぎもとこふんぐん げんきょうず 柳本古墳群の現況図

標柱と説明板が立っている/背後は水堀の向こうに後円部



# 史跡 黒塚古墳

(古墳時代前期)

黒塚古墳は、墳丘の主軸を東西方向に置き、後円部を東にする前方後円墳です。全長約130m、後円部直径約72m、高さ約11mの規模を有します。後円部の調査では、中央部において主軸に直行する、南北方向の竪穴式石室を検出しました。

竪穴式石室は南北長さ約8.3m、北小口幅は約1.3m、南小口幅は約0.9m、高さ約1.7mです。石室規模は全国第4位の規模であり、特に墳丘の規模の比較からすれば長大な石室が作られていたと言えます。

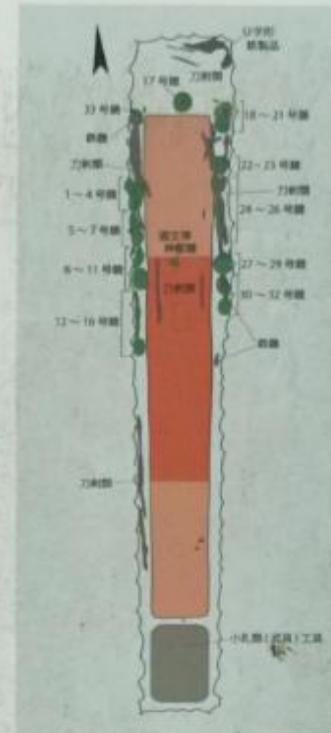
石室の構造は、下部を3～4段が人頭大の自然石を積み上げ、この上部から天井部までは板石により強く持ち送りながら壁面を作っています。このため板石で積まれた壁面は、断面が三角形形状を呈する合掌式の竪穴式石室であることがわかりました。

石室内には南北長さ約6.2m、幅約1mの粘土で作られた棺台が置かれていました。断面はU字形であることから、本来は割竹形木棺がこのうえに置かれていたことでしょう。ほぼ中央部は鮮明な朱色を呈しますが、分析の結果水銀朱が付着しています。おそらくこの範囲が被葬者の埋葬された場所と考えられます。

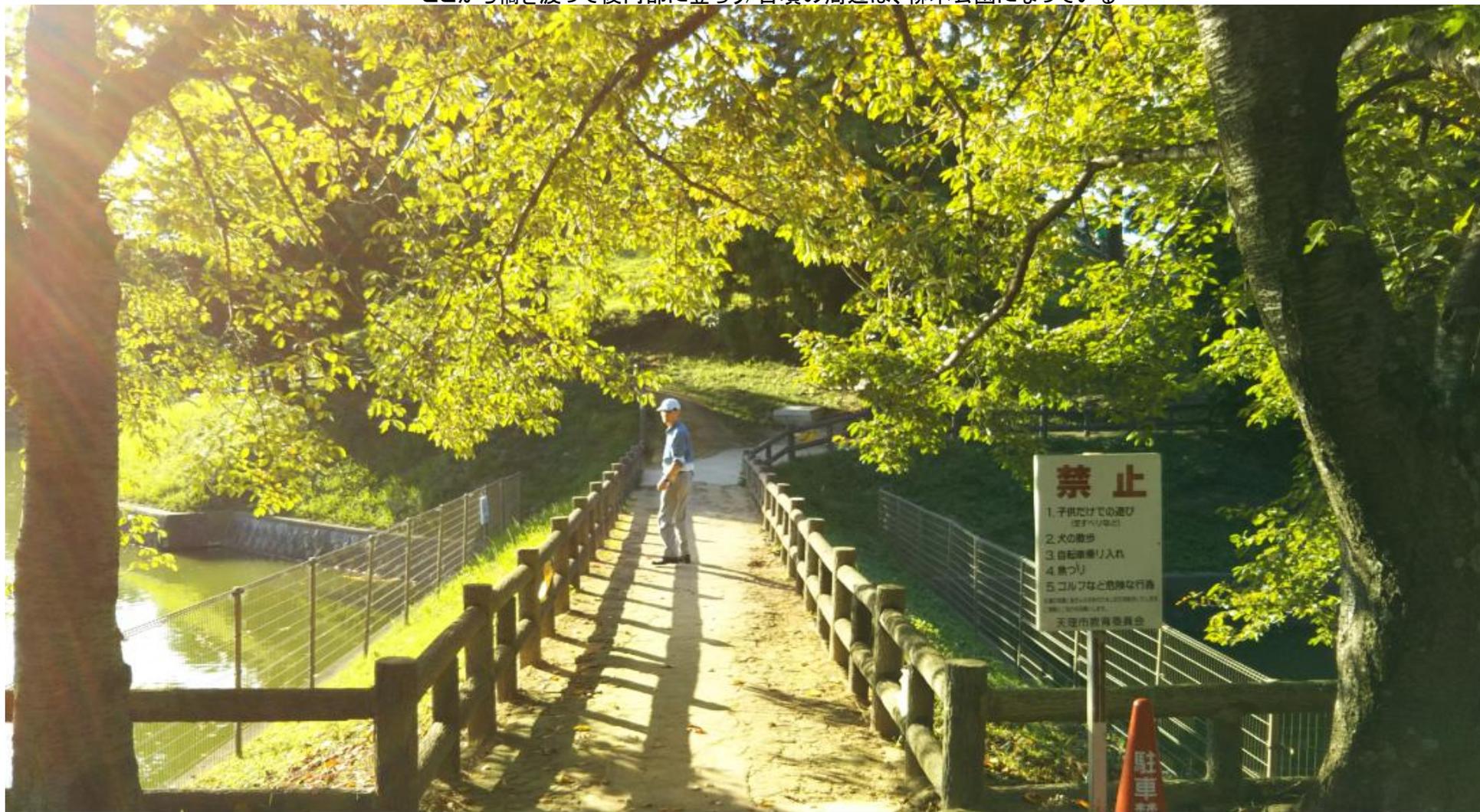
石室に残された遺物は盗掘を免れ、埋葬された当時のまま出土しました。棺内の遺物は画文帯神獸鏡1面が立った状態であり、その両脇からは刀剣が2振り置かれていました。棺外では33面という大量の鏡が、棺と壁面の間、および北小口に立てかけるように置かれていました。鏡式は全て三角縁神獸鏡であると言う点もこれまでにない特徴です。そして鏡に重複するように、刀剣類、鉄鍔、棺などが出土しました。

今回の調査成果は、古墳築造に込められた当時の葬送思想の解明ばかりか、初期ヤマト政権の成立を究明する重要な資料となるでしょう。

平成13(2001)年1月29日 国史跡指定  
平成22(2010)年3月 天理市教育委員会



ここから橋を渡って後円部に登ろう/古墳の周辺は、柳本公園になっている



橋の上から左手に後円部の裾を見たところ



同じく右手に後円部の裾を見たところ



橋を渡ると足元に説明坂がある



## 黒塚古墳の全景(南から)

黒塚古墳は柳本町の市街地に所在し市民の憩いの場所となってきた。古墳時代前期に築造された全長約132mの前方後円墳である。現在地は後円部の東側裾付近である。この古墳は、行燈山古墳あんどんやまこふん(崇神天皇陵古墳すじんてんのうりょう)を盟主墳とする柳本古墳群こふんぐんの中にあり、古墳群では最初に築造された古墳であると推定される。



後円部の墳頂には石室の位置を表したタイルが敷き詰められている



こんな塩梅/横から見たところ/右手に説明坂が見える



割竹形木棺を置いた粘土床一面が水銀朱の層で赤く染まっていたと云う

### 後円部に作られた竪穴式石室

北側から竪穴式石室と副葬品が配置された様子を見ている。棺内中央には西文帯神歌鏡と刀剣が置かれていた。西文帯神歌鏡は、直径19.5cmで後円部付近にあり、周囲に置かれた三角縁神歌鏡に比べても小さい。副葬者が日常的に使っていた鏡であろうが、頂上部を隔てる石列は、竪穴式石室を構築するための基礎ラインを表している。東西15m以上、南北17m以上の大規模な基礎である。西側の石列の石列は墓道(作業道)を表している。



竪穴式石室は、現在の頂上から約2mの深さに作られている。発掘調査により、盗掘や地震によって散乱していた石材や土砂を取り除いた。竪穴式石室は、後円部のほぼ中央にあり、長さ約8.3m、幅約0.9~1.3mの規模で、南端付近での高さは約1.7mの長大な石室である。中央に赤く染まっているのが、竪穴式石室の内部におかれた粘土棺床である。この上に長さ

6.2m、直径1mを超えるクワの巨木で作られた割竹形木棺が置かれたが、すべて肩が残っていない。竪穴式石室の周囲には、石室の構造を支えるための裏込石が集積され、さらにこの石の上を粘土で被覆している。



### 竪穴式石室の崩落状況

地震で崩壊した竪穴式石室である。写真の中央が石室の室頭部分にあたるが、ここには左右の両壁から滑り落ちた板石が室間を満たしていた。これにより、板石の直下にあった鏡などの副葬品は盗掘から免れたのである。地震は古墳が作られてから程なく発生したようで、強い揺れは石室以外の場所でも影響が観察された。



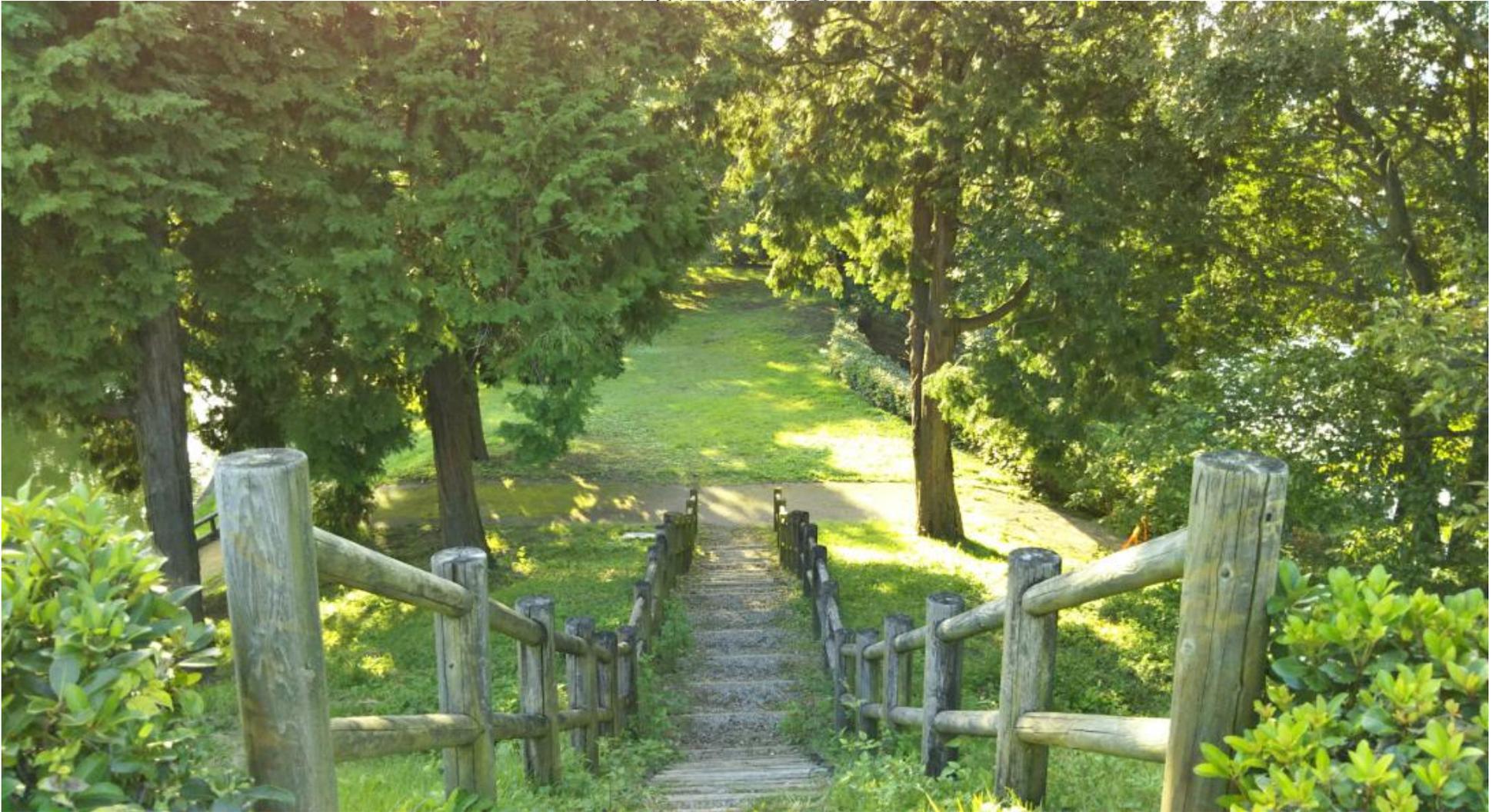
### 石室の南側

竪穴式石室の南側が破壊を免れていた。石室は床面からの高さが約1.7mあり、両側壁が天井部で重なる合掌形の構造である。大和古墳群でも初期に築造された竪穴式石室に採用されたが、石室構造が不安定であるため類例は少ない。

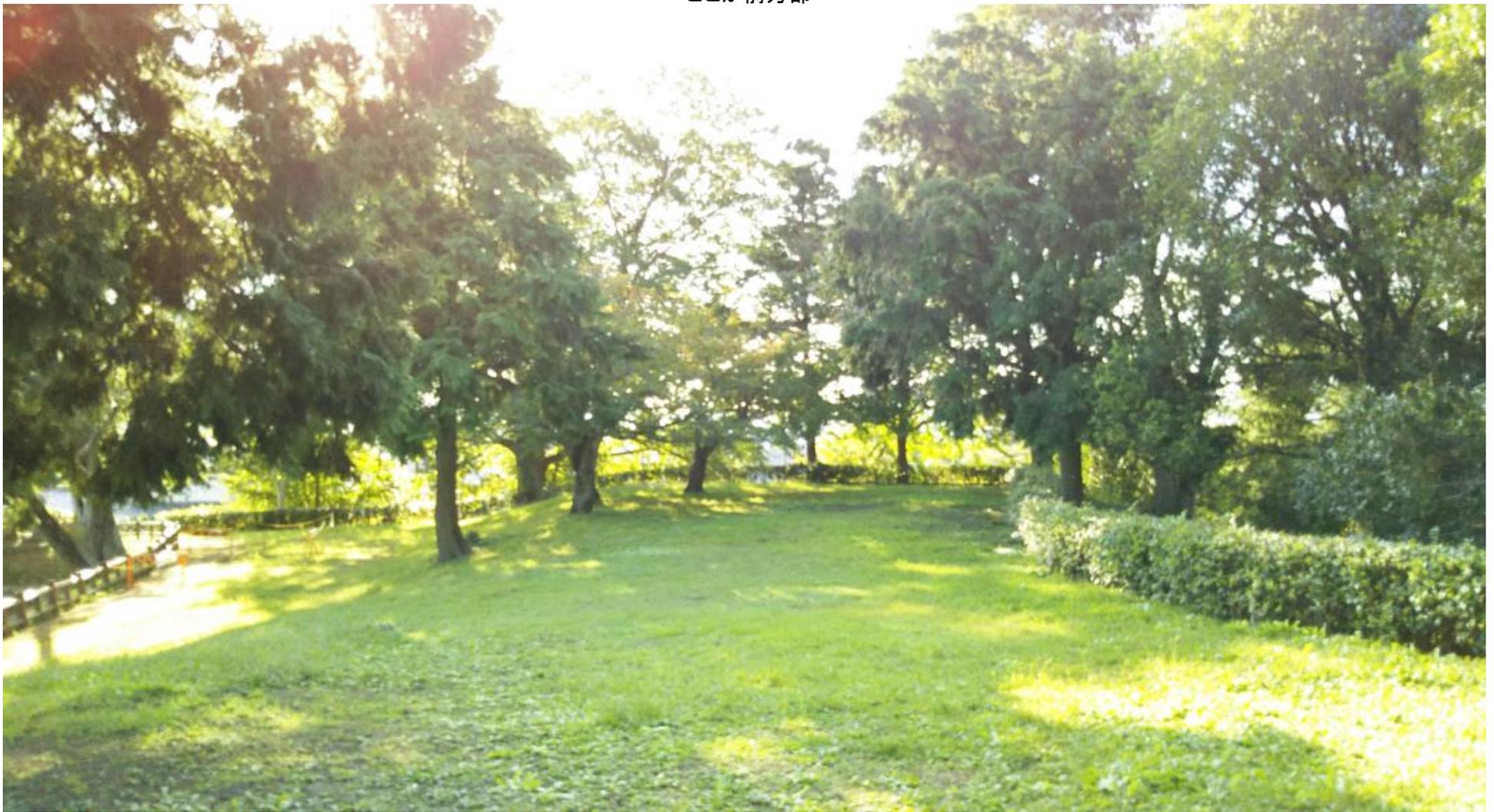
石室の下部は3~4段を川原石で構築し、上部は板石を強く持ち送る。川原石にはベンガラが塗布され石室内の荘厳を醸している。



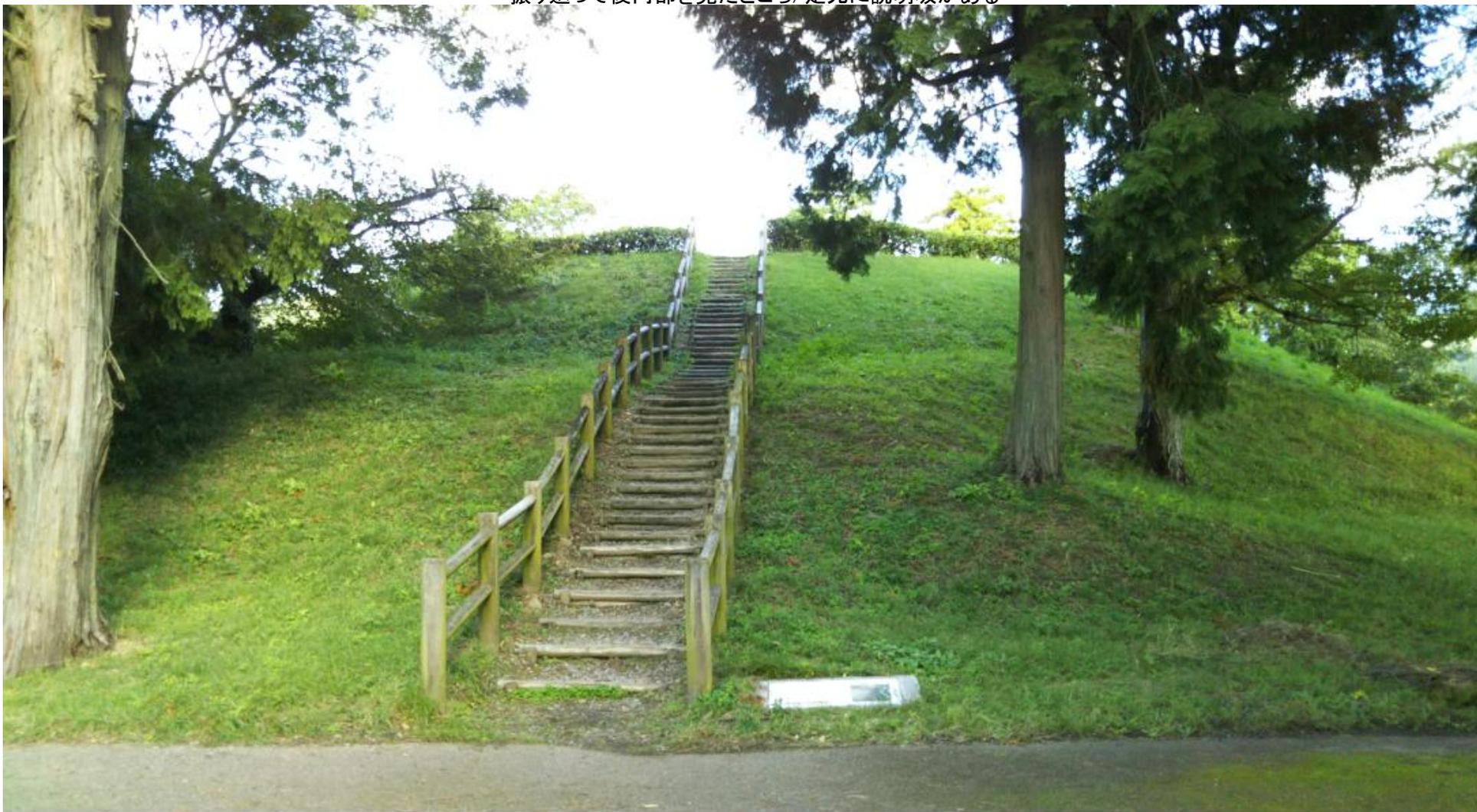
後田部墳頂から前方部を見たところ



ここが前方部



振り返って後円部を見たところ/足元に説明坂がある



中世には柳本城として、近世では柳本陣屋として使われていた

## 城郭じょうかくに利用された跡

くびれ部付近で検出された掘割ほりわりである。V字状にうがたれ、上面の幅は約6mあり、深さは3mに達する。後円部と前方部を分断して、後円部を主郭しゅかくとし守りの要としたのであろう。室町時代後半の戦国時代になると古墳が大幅に改変されて砦とりでとして利用されたのである。



あしもとの部分は掘割を表わしている。

西から▶

写真は奈良県立橿原考古学研究所提供

少し退いて前方部から後円部を見たところ



そこで右手を見たところ/丁度くびれ部の辺り



これは前方部の端にあった文政6年(1823年)に村民が柳本藩中の安寧と五穀豊穰を願って造立した石碑



前方部から後円部方向に墳丘の裾を見たところ/前方部が撥形に開く古式の墳形/水堀は周濠の跡



ここは併設されている黒塚古墳展示館



竪穴式石室の実物大模型が展示されていた



参考ホームページ

<http://www.kashikoken.jp/museum/yamatonoiseki/kofun/kuroduka.html>

<https://www.travel.co.jp/guide/article/1840/>

[http://inoues.net/club/kuroduka\\_museum.html](http://inoues.net/club/kuroduka_museum.html)

<https://ameblo.jp/buzz--yupphy/entry-12363888187.html>

<http://sakuwa.com/p2.html>

<http://spinfo.jp/nara/tenri/kurozukakofun/>

[http://kanko-tenri.jp/kanko\\_guidance/nanbu/kurotuka\\_kofun.html](http://kanko-tenri.jp/kanko_guidance/nanbu/kurotuka_kofun.html)

